

## 聖書を眼鏡として原発問題を読む

水草修治

### はしがき

原発問題は、文化命令と人間の罪の問題を根とし、科学・技術・経済・国家権力・国際政治などさまざまな側面を含んでいる。我々は聖書を信仰と生活の唯一絶対の基準と信じる者として、聖書、創世記1章から11章をアウトラインとして、原発問題について考えてみたい。

なお、本稿は2012年12月10日 同じ表題で話されたTCU教会教職特別セミナーの原稿に若干筆を入れたものである。

### <アウトライン>

#### 序 聖書の時間論と歴史観

- 1 文化命令と人間の堕落・・・「慎み」と「貪り」(創世記1:27, 28)(創世記2:15-17)
  - (1) 文化命令・・・「慎み」
  - (2) 堕落と罪への傾向性・・・「貪り」
  - (3) 人間の分と原子力発電
  
- 2 諸技術はカイン族から生じた
  - (1) カインと都市の始まり(創世記4:16, 17)

(2) 技術の起源とその傾向性 (創世記 4:19-26)

### 3 バベルの塔・・・国家権力と原発 (創世記 10:8-12、創世記 11:1-9)

- (1) 技術が権力と結びつくとき
- (2) 原発と核兵器は国家主導科学技術としてのみ可能な巨大技術である
- (3) 原発における労働と生命の貪り (ヤコブ 5:1-5)
- (4) 権力者が原発を欲する理由
- (5) 帝国と属州 (マタイ 2:1-6)
- (6) 原発マモニズムと数々の偽り (マタイ 6:21-24)

## 結論

<本文>

### 序 聖書の時間論と歴史観

福音主義神学会は聖書信仰に立つことを標榜する学会であるから、原発問題を聖書という眼鏡をかけて見てみたい。

今回、特に<創世記 1 章から 11 章>をアウトラインとする理由をまず説明しておく。創世記 1 章から 9 章には、万物と人類の創造 (1、2 章)、人類の墮落と救いの約束 (3 章)、墮落の後の二種族の人類の歩み (4、5 章)、そして最後の審判としての大洪水 (6-9 章) にいたるまでの歴史が凝縮されている。人類の歴史は一度は終わった。今、我々が生きている歴史はいわば二度目の歴史である。ここには、神、人間、墮落と贖罪の約束、環境観、歴史観、文明観、最後の審判といったことが凝縮されている。加えて 10 章、11 章には再出発後の人類の最初の出来事としてバベルの塔の事件が記されている。創世記 1~11 章を見るならば、神の前での人類の歴史の論点が明瞭である。これが創世記 1 章から 11 章をアウトラインとして採用する理由である。

では、聖書の歴史観とはどういうものか。一般に古代インド・ギリシャ的な時間観は円環であるといわれる。それは自然宗教的な世界に共通している。生々

流転の営みから推して、時を同じことの繰り返しと見なす見方がそこにある。だとすれば円の上には特定点がないように、時の中に起ることに新しいことはない。今起っていることは、過去にも起ったことであり、明日起ろうとしていることもまた過去の繰り返しにすぎない。時が円環であれば特定の時も特定の事件も特定の意義もない。シーシュポスは、オリュンポスの神々から罰として大岩をとがった山頂に運び、頂にこれを載せるとこれが転がり落ち、またこれを山頂に運ぶという無意味な円環的永遠の苦役を課せられた。円環の時のなかに歴史意識は生まれない。

他方、聖書的な時間観は、創造から終末 (御国の完成) に向かう矢であるといわれる。直線的時間論と一般には呼ばれるが、厳密には、線分的時間論である。両端があるからである。線分上の点はすべて特定点であるから、時のなかに起ることすべては特定の出来事であって意味があり、そこに歴史意識が生じる。

しかし、さらによく考えてみよう。歴史を学ぶことの意義は過去に起った出来事を教訓として、今日を知り、明日の歴史形成に役立てることである。もし、過去と現在が、似ても似つかぬ特有のものであれば、過去を教訓とすることは不可能である。実際には、過去の出来事と今日の出来事に類似性があるからこそ、そこに教訓を得て明日の歴史形成に役立てることができる。過去と現在とは類似しているが、同時に相違点もあるからこそ、過去に学んで明日の歴史形成が可能である。

聖書的な時間には始まりがあり終わりがある。だが、聖書的な時間のもう一面は、「繰り返す」ということである。こうした「時」の姿は、創世記一章における七日間の創造の記事にも表現されている。時は一日、二日、三日……七日まで直線的であり、それぞれの日に特有の創造の出来事があるが、同時に、「夕があり、朝があった」ということが繰り返される。時は繰り返しつつ、始まりから完成へと前進する。神が天体の円運動に時の管理を委ねられた (創世記 1:14, 15)。だから、私たちは新しい朝を迎えると、「今日こそやり直すぞ」と思い、新年を迎えると「今年こそ」と決意を新たにすることが許されている。つまり、時には創造から終末に向かう線分という側面と、円環という側面がある。すなわち、聖書的な時間観とは螺旋的なものである。時の螺旋構造についてはレビ記



25章における時の聖別にも表現されている。一年を七年繰り返して七年目は安息の年となり、安息の年を七回繰り返して、次の年はヨベルの年である。聖書的な時は螺旋のように、繰り返しつつ、始まりから完成に向かって前進する。

こういうわけで、我々が創世記1章から11章における創造から終末と再出発の出来事の記述から学びうるのは、歴史は繰り返し、かつ、歴史は繰り返さないからである。

## 1. 文化命令と人間の墮落

「神はこのように人をご自身のかたちに創造された。神のかたちに彼を創造し、男と女とに彼らを創造された。神はまた、彼らを祝福し、このように神は彼らに仰せられた。『生めよ。ふえよ。地を満たせ。地を従えよ。海の魚、空の鳥、地をはうすべての生き物を支配せよ。』」（創世記1:27, 28 新改訳第二版）

「神である【主】は人を取り、エデンの園に置き、そこを耕させ、またそこを守らせた。神である【主】は人に命じて仰せられた。「あなたは、園のどの木からでも思いのまま食べてよい。しかし、善悪の知識の木からは取って食べてはならない。それを取って食べるとき、あなたは必ず死ぬ。」（創世記2:15-17 以下、新改訳第三版）

### （1）文化命令…慎みをもって

創世記における第一の創造記事（1:1-2:3）の記者が想定する最初の読者は、八百万の神々を崇めるエジプトから脱出してきたイスラエルの民である。このことをかんがみれば、我々が読み取るべき主要なメッセージは「創造主のみを礼拝し、偶像崇拜を避けよ」である。大気も海も大地も植物も天体も海の生き物も、陸の生き物も被造物であり、礼拝すべきはただ創造主のみである。

第一の創造記事の今一つのメッセージは、人間は神のかたちにおいて造られた神の代理として、御心にしがって他の被造物を支配する任務があるという

ことである。すなわち、本来人間は自律的存在ではなく、神律的<sup>1</sup>存在であることをわきまえているならば他の被造物を正しく支配できる。裏返して言えば、創造主からの自律を企てる者は、自らを他の被造物と区別する根拠を拒否するので、被造物の奴隷つまり偶像崇拜者となってしまう。神律を捨て自律を求め人間は、逆に被造物による他律に陥る。

また、人間が創造主のかたちにおいて造られたという事実は、人間が被造物を認識するための存在論的根拠である。認識が成立するためには、主観と客観との間に、対応関係がなければならない。両者間に対応関係がないならば、人間による被造物の認識は単なる夢だという独我論に陥る<sup>2</sup>。無限のlogosである神が、logosをもつ有限な被造物界を造られ、有限な人間の知性をもlogosにおいてご自分に似た者として創造されたので、外界のlogosと人間の知性のlogosとの間に対応関係があり、だからこそ、人間の被造物認識には正当な根拠がある。

第二の創造記事（2:4-25）は人間に焦点を絞る。ここでは園における被造物の管理のありかたと、結婚の定めが啓示されている。主は人間を園に「置き」、園を「耕し」かつ「守る」ことを命じられた。「耕す（アバド）」とは、「しもべ（エベド）」と同根のことばであるから「世話をする」とも訳しえようか。これは、本来、神が人に命じた被造物の支配とは暴君的支配ではないことを示している。また、被造物の管理は、本来、墮落後の苦役ではなく、墮落前に与えられた祝福ある任務すなわち文化命令である。

この文化命令には「園のどの木からでも思いのまま食べてよい」という許可と、「しかし、善悪の知識の木から取って食べてはならない。それを取って食べるとき、あなたは死ぬ。」という制限と警告が伴っていた。人は善悪の知識の木を見るたび、園の所有者は神であり、自らは園の管理者であることを思い起こす。管理者は自律的ではなく神律的に園を管理しなければならない。園の管

<sup>1</sup> 「神律 theonomy」という表現は、ナチズム的全体主義の下での「他律 heteronomy」と、「自律 autonomy」であるが空虚で無力な自由主義を超克するものとしてティリッヒが用いたことば。筆者はティリッヒと立場は異なるが、この神律という用語は優れている。

<sup>2</sup> <世界も他者もすべてが「わたし」の意識の像つまり夢にすぎない>というのが独我論である。デカルトは「神の誠実 veracitas dei」を主張することによって、独我論の陥穽をのがれている。



理者の心得の要点は、己が分をわきまえる「慎み」である。

「善悪の知識の木」は神の人に対する権威のシンボルである。人は善悪の最終決定権をもたず、それは神が持ったもう。人は神が定めた善悪の枠のなかで、自由といのちを経験する。もしその枠を越えて出るならば、「死」すなわち神との断絶という事態に陥る。

### (2) 墮落と罪への傾向性…貪り

へびは、「あなたがたがそれを食べるその時、あなたがたの目が開け、あなたがたが神のようになり、善悪を知るようになる」(3:5)と誘惑した。実際、彼らが善悪の知識の木から実を盗って食べたとき、神は「人はわれわれのひとりのようになり、善悪を知るようになった。」(3:22)と仰せになっているから、「神のようになり」とは「善悪を知るようになる」と同義と解される。「善悪を知る」とは、神を抜きにした自律的存在となるという意味である。

戒めに背いて善悪の知識の木から盗って食べた結果、アダムとその子孫は次のような罪性を帯びた。人間は己を自律的存在と思ひ上がり、神の指図を受けず被造物を支配しようとする。人間としての慎みを忘れて、神の領域を侵そうとする「貪り」である。「貪り」とは己に属さないものを欲する不当な欲である。貪りの結果、人は被造物に跪拝する偶像礼拝者となった。自律を目指して神律を拒否した人間は、皮肉にも被造物に支配され他律に陥る<sup>3</sup>。また、墮落した人間は「生まれつき、神と隣人とを憎む傾向にある<sup>4</sup>」ようになり、隣人を貪る者となった。かくて最初の夫婦は仲違いし、彼らの子は兄弟殺しをしてしまう。

### (3) 人間の分と原発

医療のX線利用をかながみれば、おそらく核エネルギー利用すべてが人間の分を越えていると即断すべきではあるまい。だが、巨大なエネルギーを発する原子力発電は、人として扱える分を越えたことである。なぜなら、人間には、天災・テロ・人為的ミスによる破綻を想定すると、莫大なエネルギーと危険な放

<sup>3</sup> ダニエル 4:28-33 でネブカデネザルに起ったことを参照。またローマ 1:20-25 も参照。

<sup>4</sup> ハイデルベルク信仰問答問答 5

射能を放出する原子力発電システムを制御することはできないし、その上、原発が正常に稼働していても排出される放射性廃棄物を十万年単位の長期にわたって無毒化する能力も持ち合わせていないからである。

しかし、わが国では原発を制御可能だと思ひ上がり、これを 50 余基もこの地震列島に造り、そして、福島第一原発事故によって自らの生活する環境をも破壊してしまった。現在、政府は一方で、近々、M9.1 の南海トラフ大地震がこの列島を襲う危険性への警戒を呼びかけながら、今なお、想定震源域の震央に位置する浜岡原発に 12510 本もの使用済み核燃料が貯蔵したままであり<sup>5</sup>、さらに今後、各地の原発を順次再稼働させようとしている。しかも、それは原発がなければ電力が不足するからではなく、電力会社の経営上の都合のゆえであり<sup>6</sup>、後述するように、潜在的核兵器保有国であろうとする国の指導者たちの意思ゆえでもある。

我が国は、本来、道具にすぎない原発によって、国土の一部を事実上喪失し、住民は故郷と生活を失い、国民は被曝による健康被害と再び起る原発事故を恐れながら、しかも、これをやめることができないでいる。道具の奴隷である。

<sup>5</sup> 中部電力 H P を参照 [http://www.chuden.co.jp/energy/hamaoka/hama\\_jisseki/shiyo\\_zumi/index.html?cid=ul\\_me](http://www.chuden.co.jp/energy/hamaoka/hama_jisseki/shiyo_zumi/index.html?cid=ul_me)

<sup>6</sup> 2012 年 4 月 24 日大阪市エネルギー戦略会議で、電力会社が原発をやめられない本当の理由は、夏のピーク時の電力不足の問題でもなければ、技術的問題でもないと言電が明言している (<http://kaleido11.blog111.fc2.com/blog-entry-1273.html>)。関西電力が原発を再稼働させたい真の理由は、原発が廃炉ということになると、関電が経営破たんするからである。

<関西電力の経営事情 2011 年度決算>

☆原発を廃炉にすると資産が半減する

純資産(資産-負債) 1兆 5298 億円

原子力発電設備・核燃料 8907 億円

だから、もし原発が使えないとなると、純資産は 6391 億円に激減する。

☆しかも、2011 年度の赤字は 2422 億円である。

☆電力料金は総括原価方式であるから、電力料金収入は、1兆 5298 億円×3% = 約 459 億円から 6391 億円×3% = 約 192 億円 に激減する。

今後原発以外の燃料で発電するとすれば、赤字はふえていく。さらに廃炉するためのコストも莫大である。原発が使えなければ、2~3 年で関電は経営破綻してしまう。